

---

# 津和野観光の季節変動性とライフサイクル

## Tourism Life Cycle and Seasonality of Tsuwano Town

ペルラキ・ディーネシュ\*・森 朋也\*\*・生嶋 亜樹子\*\*\*

PERLAKY Denes \*, MORI Tomoya\*\*, SHOJIMA Akiko\*\*\*

### (摘要)

本稿の目的は、津和野観光のライフサイクルを観光需要の季節変動性指標を用いて分析することである。指標の作成にあたっては、島根県が公表している月別の宿泊者数と入込観光客数を用いた。さらに、本稿の分析では、季節変動性指標の変遷を捉えながら、観光地理学者であるバトラー (R. W. Butler) による観光地ライフサイクル仮説の観点からも、津和野観光の動態にアプローチした。考察の結果、津和野観光の今後としては、観光需要の平準化しつつ、観光地の「許容能力」の範囲内で持続的な発展経路を描くべきであることが示唆された。

キーワード：津和野、観光の季節変動性、TALC、地方観光、持続可能性

### (Abstract)

The aim of this research paper is to assess the development cycle of Tsuwano Town by analyzing the seasonality of tourism demand for the destination. The base of the seasonality calculation is the overnight stay and visitor statistics published by Shimane Prefecture. Furthermore, apart from the seasonality analysis, this paper also utilizes the Tourism Area Life Cycle model created by tourism geography researcher R. W. Butler. The findings of this research show that the seasonality (volatility) of tourism demand for Tsuwano Town is decreasing and that there is a strong need for sustainable tourism development that does not exceed the carrying capacity of the destination.

Keywords: Tsuwano Town, Tourism Seasonality, TALC, Rural Tourism, Sustainability

## 1. 津和野観光の概説

本稿は、津和野観光のライフサイクルを観光需要の季節変動性指標を用いて分析することを目的とする。まず、本節では、津和野とその観光について概説したい。ここで、本論文では、一般的に呼称される「津和野」で表記するが、形式的に行政組織を指す場合や行政組織としての活動について言及する場合には「津和野町」と表記する。

### 1.1 津和野の歴史

津和野町は、島根県の最西端に位置する、一見する

と日本のどこにでもあるような小さな町である。津和野藩の中心であった城下町には、昭和と平成の大合併により周辺の町村が加わり、2015年の人口は7,653人となっている(文献[1])。現在は、隣接する島根県益田市と山口県山口市の商圏に組み込まれている。

津和野藩の歴史は、1295年に吉見氏によって津和野城が築城されたこと契機に始まった。吉見氏の滅亡後、江戸時代初期に津和野藩を治めることになった坂崎氏と1616年から幕末までの藩主であった亀井家が、精力的に産業開発と人材育成を行った。津和野城の改修に加えて、現在の津和野観光の目玉となっている城

---

\* 山口大学経済学部

\*\* 山口大学教育学部

\*\*\* 山口大学教育学部

下町の形成もこの時代に行われ、街としての環境を十分に整えてからは、和紙産業と教育に注力した。明治維新にも貢献した歴史上の偉人たちが教育を受けた藩校養老館は、その教育政策の遺跡として残っている。廃藩置県において藩主の屋敷を浜田に移築し、藩主の亀井家は明治時代に津和野を離れ東京に拠点を移した。

戦後の津和野は、高度経済成長や国土再開発の影響を大きく受けることなく、農林業を主たる産業としていたが、1962年(昭和37年)に森鷗外生誕百周年祭がメディアに取り上げられたことを契機に、観光地として全国的に注目されるようになった。個人旅行の機運が高まった1970年(昭和45年)の大阪万博後は、国鉄による旅行者拡大キャンペーン「ディスカバー・ジャパン」が打ち出され、大都市の若者をはじめとした大勢の観光客が伝統的な日本の風景を探し求めることとなった。このキャンペーンと当時社会現象にまでなった「アンノン族」と呼ばれる新しい観光スタイルにより、津和野を訪れる観光客は急増する。津和野町では、昭和40年代に「観光立町」を掲げつつも、観光需要に対応する施設の増設に際しては開発か保全かが議論となり、また、当時の観光誌に「観光公害」に関する言説もみられる(文献[2])。このことは、観光ブームにおいて人々が求めていた津和野観光の価値が「小京都」という言葉に集約される歴史や伝統、自然や地域の人々の生活の姿におかれていたこと、それが観光需要の拡大期においても津和野観光の特徴を形成してきたといえるだろう。

## 1.2 津和野の観光資源

津和野は「山陰の小京都」とも呼ばれており、京都から伝わった鷲舞や津和野踊りなど、観光資源としての無形・有形文化財に恵まれている。また、戦火を逃れ、大規模な開発も行われなかったことから、町の中心部は明治初期当時の街並みがほぼ変わらず残っている。2013年には重要伝統的建造物保存地区に指定され、数多くの重要文化財や登録文化財が、所有者や街並みの保存団体によって保存・管理されている。津和野は、保存・管理の行き届いた豊かな観光資源を数多く有し、「地方城下町」としては決して他に劣らない観光地であるといえる。しかし、祭りなどの伝統行事が取り上げられがちであるがゆえに、観光客の激しい季節変動が発生する側面もある。

観光地津和野の年間行事は太鼓谷稲荷神社の初詣から始まる。人口7,653人(2015年)の町に、三が日で

約20万人以上が訪れる初詣は、津和野の新年を賑やかなものに行っている。近年参拝者数が減少しているものの、2019年には一月は太鼓谷稲荷神社の年間入込観光客数の38%に相当していた(文献[3])。4月の桜の時期に行う流鏝馬神事は、全国で唯一現存している流鏝馬馬場で開催され、鎌倉の小笠原保存会を招いて実施する。7月20日と27日に行われる鷲舞神事は、二人一組となった踊り手が木製の白鷲に模した衣装を纏い、弥栄神社からお旅所までの町内十数カ所を踊り歩く、450年以上の歴史がある行事である。近年では、地域の小学生による子鷲踊りも行われており、平日でも多くの観光客を引き寄せる津和野の一大イベントとなっている。8月に行われる津和野踊りは、亀井家の勝利を再現する盆踊りのことである。提灯の灯った城下町で、観光客と地域住民とが一緒に踊りを体験できることから、8月15日には大勢の観光客が集まる。

表1に、津和野町観光協会の「歳時記」に記載されているものを参照して、一年間の津和野の行事・イベントを整理した。これらの行事・イベントは、本来的には観光のために催されているものではないが、外部からの来訪者を津和野に引き寄せる一つの観光資源となっている。とりわけ、1月の元旦祭、4月の流鏝馬神事、5月の乙女峠祭り、7月の祇園祭(鷲舞神事)は、観光客で大いに賑わう行事である。

表1: 年間の行事・イベント

月	日	行事
1月	1日~3日	元旦祭
4月	第1日曜日	流鏝馬神事
	8日に近い日曜日	花まつり
5月	3日(GW)	乙女峠祭り
	15日	太鼓谷稲成神社春季大祭
6月	30日夕方より	輪くぐり神事
7月	7月20日、27日	祇園祭(鷲舞神事)、子鷲踊り
	7月	お城下音頭、夜市
8月	8月10日	柳まいり
	8月15日	殿町盆踊り、お盆踊り大会、灯籠流し、夜市
10月	10月第3日曜日	芋煮と地酒の会
11月	11月15日	津和野旅館組合 芋煮ふるまい祭
	11月15日	太鼓谷稲成神社秋季大祭
	11月23日に近い日曜	奴行列

出所: 津和野町観光協会ゆ〜うにんさいを参照。

(<https://tsuwano-kanko.net/sightseeing/saiziki/>)

## 2. 津和野観光の季節変動性

本節では、島根県が公表している統計資料を用いて、津和野における観光需要の季節変動性を分析する。

### 2.1 観光の季節変動性

観光需要は、様々な要因によって季節ごとに変動することが知られている。その変動は、「観光客を意味する需要過程、受け入れ先である観光地を意味する供給過程と、戦略やマーケティングを意味する調整過程の3つの過程」(文献[4])、さらに、その3つの過程の相互作用を通して生まれる。また、その諸要因は、発着地の気候や地理的条件などの自然的な要因と、祝日制度や企業のマーケティングなどの社会経済的な要因に大きく分けられる(文献[5])。それらの諸要因が絡み合いながら、その需要が比較的に様に分布するか、いくつかの大きなピークを持つかは、観光地ごとに異なる。一般的に、観光の季節変動性は、その観光地の地域の特徴を表しているといえよう。例えば、一年間の需要分布が一つの大きなピークによって特徴づけられるものを単峰型といい、二つの場合に双峰型、三つ以上の場合に多峰型、一年間を通じて均等に分布している場合に一様分布型と呼ばれる(文献[4])。

ここで、繁忙期と閑散期の変動が大きいほど、地域の観光産業に不安定性が生じることが知られている。例えば、季節変動が大きいほど、企業は設備投資に消極的になるために、資本蓄積が進まない、あるいは、非正規雇用に依存するために、労働市場が流動的となり、人的資本の蓄積が起りづらいために、観光産業全体として生産性の向上が抑制されることが知られている。文献[6]は、スペインにおける宿泊業では、季節変動が大きいほど、その生産性が低まることを明らかにしている。加えて、インバウンド観光客の流入は、需要のピークを高めるために、季節変動の上昇を通して、さらに観光産業の生産性に負の影響を持っていることを明らかにしている。一方、文献[7]は、日本においては、国内観光客があまり訪問しないシーズンにインバウンド観光客が訪日するので、観光需要が平準化されて、宿泊業の生産性が平均的に改善されたことを明らかにしている。

もちろん、これらの影響は経済面だけではなく、その他の社会的な側面においても問題が生じる可能性がある。例えば、観光需要が一時点に過度に集中することで、地域の自然環境に深刻な負担をかけることなどが挙げられる。いずれにせよ、偏った需要の変動性を

平準化させることが、観光産業や地域社会の持続可能性に対して重要であるといえる。

以下では、津和野における観光動態と季節変動性を量的に把握することで、観光地としての特徴と課題を明らかにしたい。

### 2.2 季節変動性の指標化

観光研究では、観光需要の季節変動性を測るためにいくらかの指標が用いられている。

代表的なものとして、所得の不平等に関する指標であるGini係数を用いた方法がある。観光研究においては、各月を階層  $n(i = 1, 2, \dots, 12)$  として考え、それぞれ観光需要  $x_i (i = 1, 2, \dots, 12)$  の値を用いて算出される。具体的には、以下の(1)式が用いられる。ここで、 $\bar{x}$  は観光需要データの平均である。

$$G = \frac{\sum_{i=1}^{12} \sum_{j=1}^{12} |x_i - x_j|}{2n^2 \bar{x}} \quad (1)$$

本稿では、Gini係数に加えて、季節変動性の指標として、標準偏差(SD)を平均値( $\bar{x}$ )で割った変動係数(CV =  $SD/\bar{x}$ )、観光需要が最も大きい月の値( $x_{max}$ )と最小の月の値( $x_{min}$ )、およびその比率( $x_{max}/x_{min}$ )、平均値( $\bar{x}$ )を観光需要の最大値( $x_{max}$ )で割った文献[8]による季節変動性指標( $\omega = \bar{x}/x_{max}$ )も用いる。

### 2.3 使用データ

観光の季節変動性を指標化する際には、観光客数、宿泊者数、あるいは、観光支出額が用いられる。残念なことに、観光支出額のデータは入手することができなかった。一方で、他二つのデータは、島根県が公表している月別の統計資料『島根県観光動態調査』(文献[3])から入手可能であったために、本稿では宿泊者数と入込観光客数による分析を行うこととした。

ここで、一般的には、宿泊を伴う観光と、日帰りや一時的な滞在などの観光それぞれでは、異なる傾向となることは想像に難くない。そこで、本稿では、両方のデータを用いて、異なる二つの季節変動性が把握することが期待できる。

ただし、訪問観光客数のデータは、施設ごとの観光客数を集計した入込観光客数となっている。このために、新しい施設が加わることで、観光客数の総数が増えてしまい、年度ごとの比較が難しくなる。そこで、本分析においては、比較的どの観光客も訪問する太鼓稲成神社、森鷗外記念館、安野光雅美術館の訪問客数を合わせた総数を訪問観光客数として用いることとした。このような処理をすることで、正確な津和野へ

の訪問観光客数は把握できない一方で、年度ごとの傾向の比較が可能となる。

### 2.4 分析結果と考察

まず、津和野の観光動態を捉えたい。図1は、2005年から2019年の津和野の宿泊者数と入込観光客数の推移を示している。入込観光客は、減少傾向にある一方で、宿泊者数は2015年までは上昇の傾向にあり、そこから減少に転じている。

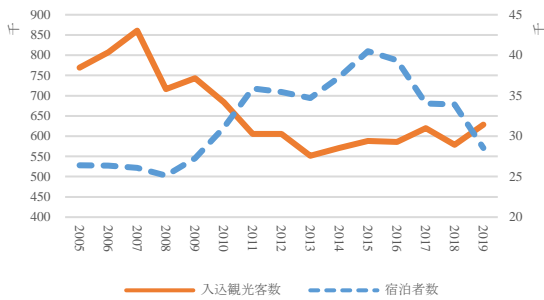
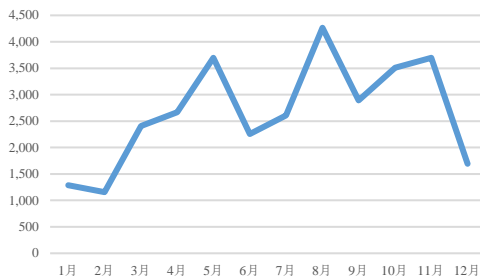


図1：宿泊者数と入込観光客の推移  
出所：文献[3]を用いて筆者らが作成。

#### (a) 月別の宿泊者数



#### (b) 月別入込観光客数

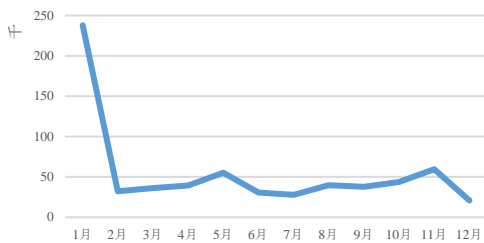
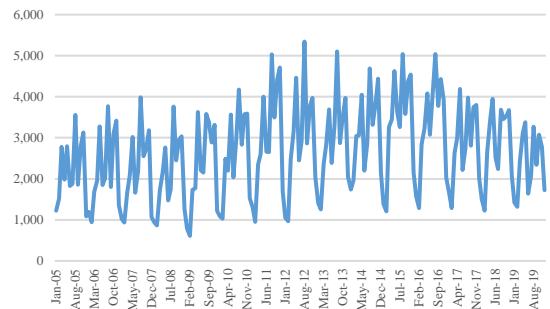


図2：各月の観光客数（2005～2019年の平均値）  
出所：文献[3]を用いて筆者らが作成。

それぞれの繁忙期と閑散期はいつであろうか。季節ごとの宿泊者数と入込観光客数の値をみよう。年ごとの特性の影響をなくすために、2005年から2019年の平均値を用いる（図2を参照）。宿泊者数でいえば、5月、8月、11月が繁忙期のピークとなっており、1月か2月に閑散期となっている。一方、入込観光客数では、1月が繁忙期となっており、閑散期は、5月と12月となっている。

#### (a) 宿泊者数の推移



#### (b) 入込観光客の推移

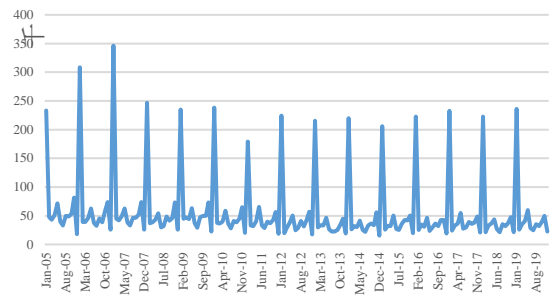


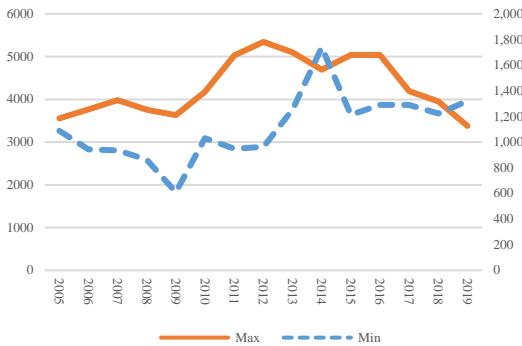
図3：月別の観光需要の推移（2005年～2019年）  
出所：文献[3]を用いて筆者らが作成。

ここから、津和野観光の季節性は、元旦祭（1月）、流鏝馬神事（4月）、乙女峠祭り（5月）、祇園祭と鷲舞神事（7月）、紅葉（11月）という供給側の自然文化要因、ゴールデンウィーク（5月）と夏休み・お盆（8月）という需要側の社会制度要因が相まって生みだされるといえる。また、12月から2月にかけての宿泊観光客の落ち込みは、積雪などの気候要因によって生まれていると考えられる。

繁忙期と閑散期のパターンをみれば、宿泊者数と入込観光客数では、異なる傾向を持っている。ただし、これは、1月の太鼓稲成神社への初詣の影響が強く反映されている。太鼓稲成神社を外してみると、や

は、5月、8月、11月にピークが来ている。視点を変えれば、津和野の観光季節変動性は、初詣という文化的な行事の影響を強く受けているといえる。ただし、宿泊者数の統計を見れば、大半が日帰りであることがわかる。

(a) 宿泊者数



(b) 入込観光客

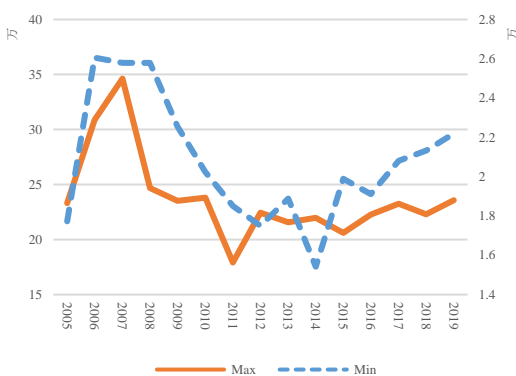


図4：月別の最大値と最小値の推移  
出所：文献[3]を用いて筆者らが作成。

さらに、観光の季節性の推移をみるために、2005年から2019年における月別の宿泊者数と入込観光客数、宿泊者数と入込観光客の最大値と最小値の推移をみたい(図3.4を参照)。最大値は、多少回復の兆候も見られるが、ピーク時と比べると低くなっている。つまり、繁忙期における観光地の吸引力が弱くなっているといえる。一方、最小値は、やはり一時よりは低迷しているが増加傾向にある。

では、津和野の観光の季節変動性は、どのような実態になっているだろうか。表2は、2005年から2019

年における、宿泊者数と入込観光客の両方におけるそれぞれの指標がまとめられている。どの指標で捉えても、入込観光客は、宿泊者数に比べて、季節変動性が高いことが分かる。これは、入込観光客数において、1月が他の月と比べて圧倒的なピークとなっていることが理由であろう。また、入込観光客の大半が日帰り観光客であることも大きいといえる。

つぎに、季節変動性の推移をみてみよう。Gini係数、変動係数、最大値と最小値の比率は、値が大きいほど、そして、文献[8]による季節変動性指標の $\omega$ は、値が0に近いほど、季節変動性が大きいことを意味することに留意したい。

表2：宿泊者数と入込観光客の季節変動性

年度	宿泊者数						入込観光客					
	Gini	CV	$\omega$	Min	Max	Max/Min	Gini	CV	$\omega$	Min	Max	Max/Min
2005	0.19	0.36	0.62	1,088	3,558	0.33	0.33	0.87	0.27	17,728	233,219	13.16
2006	0.23	0.43	0.58	944	3,764	0.40	0.39	1.15	0.22	26,058	308,807	11.85
2007	0.24	0.44	0.55	936	3,983	0.43	0.40	1.22	0.21	25,798	346,284	13.42
2008	0.24	0.44	0.56	862	3,756	0.44	0.36	1.01	0.24	25,792	246,671	9.56
2009	0.26	0.48	0.63	609	3,629	0.60	0.33	0.91	0.26	22,546	235,106	10.43
2010	0.22	0.40	0.62	1,031	4,175	0.40	0.36	1.02	0.24	20,243	238,044	11.76
2011	0.25	0.45	0.59	948	5,030	0.53	0.32	0.84	0.28	18,507	179,115	9.68
2012	0.24	0.44	0.55	964	5,343	0.55	0.40	1.11	0.22	17,501	224,489	12.83
2013	0.20	0.38	0.57	1,254	5,101	0.41	0.39	1.18	0.21	18,887	215,671	11.42
2014	0.17	0.32	0.66	1,738	4,690	0.27	0.40	1.16	0.22	15,418	219,704	14.25
2015	0.20	0.37	0.67	1,212	5,036	0.42	0.36	1.03	0.24	19,890	206,016	10.36
2016	0.19	0.36	0.65	1,289	5,035	0.39	0.38	1.13	0.22	19,110	222,606	11.65
2017	0.18	0.33	0.68	1,290	4,189	0.32	0.38	1.12	0.22	20,812	232,458	11.17
2018	0.17	0.33	0.72	1,222	3,950	0.32	0.39	1.15	0.22	21,327	222,865	10.45
2019	0.17	0.31	0.70	1,319	3,378	0.26	0.39	1.12	0.22	22,198	235,839	10.62

出所：文献[3]を用いて筆者らが作成。

まず、宿泊者数の季節変動性では、全体的に津和野は、季節変動性が小さくなっていることが分かる。この理由として、前述したように、月別の宿泊者数の最大値が減少しているのに対して、最小値が増えていることが大きいといえる。つまり、繁忙期の需要が低下しながらも閑散期において需要が回復傾向にあるといえよう。

別の要因として、宿泊施設数が減っていることで、観光の受入容量が小さくなっていることも考えられる。1985年(昭和60年)の宿泊施設数は、文献[9]に基づけば35カ所であったが、現在は、文献[10]によれば13カ所と半分以下となっている。ただし、これは、需要が減ったことで供給が調整されたのか、供給が減ったから需要が調整されたのかは一概には識別ができない。

つぎに、入込観光客数による季節変動性の推移をみてみよう。例えば、図5では、入込観光客と宿泊者数のGini係数と変動係数の推移を見れば、入込観光客

は、宿泊者数と比べて、年によってバラつきがあり、何かしらの傾向は見出しにくい。年間の入込観光客数が減っていることを考慮すれば、各月の人数が一様に減っていると考えられる。

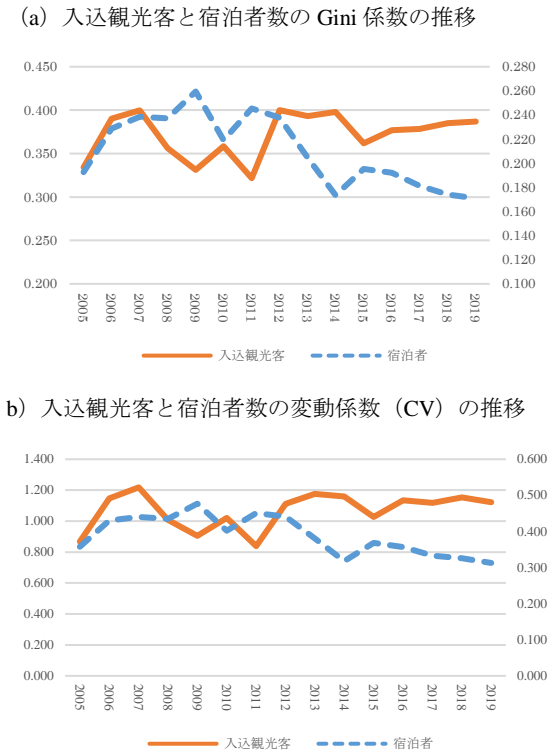


図 5：季節変動性の推移  
出所：文献[3]を用いて筆者らが作成。

ここまで、津和野の動態と季節変動性に関して、宿泊者数と入込観光客の両方の統計データを用いて指標を行い、分析を行ってきた。その結果から分かることとして、大きく二つの点が明らかにされた。

一つ目は、宿泊者数と入込観光客では、季節性（繁忙期と閑散期）とその動態に関して異なる傾向を持っていることである。この差異は、主に1月の初詣から生じている。その来訪者の大半は、宿泊を伴わないために、入込観光客数と宿泊者数で差が生まれる。

二つ目は、宿泊者数の季節変動性は小さくなっていることである。この理由としては、繁忙期のピークが減少しているのと同時に、ボトムである閑散期の人数が緩やかに増加していることが挙げられる。この他にも、宿泊施設の数が増えたことで、そもそもの観光の

供給能力が小さくなっている可能性も考えられる。

### 3. 津和野観光のライフサイクル

本節では、季節変動の分析結果にもとづいて、津和野観光の今後を考察していきたい。ここで、観光地理学者のバトラーが提唱した「観光地域のライフサイクル」仮説（Tourism Area Life Cycle；以下、TALC）を参照したい（文献[5]）。

#### 3.1 観光地域のライフサイクル仮説

TALC では、観光地の発展段階が製品のライフサイクルと同様にS字の曲線として描かれている（図8）。

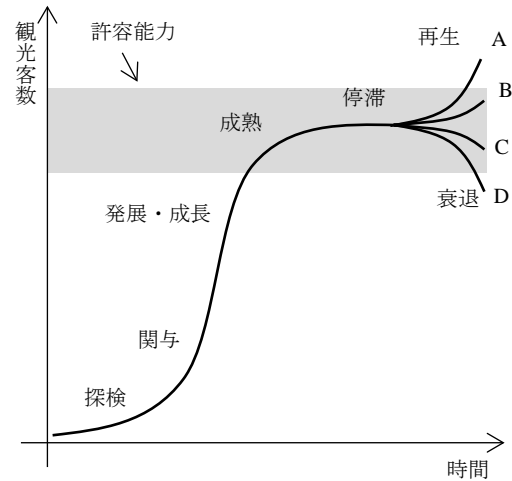


図 6：バトラーの TALC  
出所：文献[5]を一部修正して引用。

そのシナリオでは、地域の魅力が少数の探検的な旅行者によって発見され、徐々に観光地として確立していく中で地域住民が観光産業に関与し始める。つぎに、外部からの資本や労働力が流入するようになり観光市場の規模が拡大し、開発・発展が進行する。しかし、観光地として成熟を迎えると、他の観光地よりも相対的に見劣りするようになり、次第に停滞段階に入る。その後は、その市場規模が縮小していく衰退経路（D）か、あるいは、カジノやリゾートのような新たな経済開発や新たな観光資源を開発することで、観光地としての「若返り」を果たす再生の経路（A）のいずれかが描かれる。

#### 3.2 津和野における TALC

では、津和野の観光動態は、TALC でいえば、どの

段階にあるのだろうか。前節で示したように、津和野の宿泊者数と入込観光客数は、ともに総数が減少傾向にある。この推移は、大きくは、繁忙期の観光客数の減少に牽引されている。そのような観光需要の減少、さらに、宿泊施設数の減少や観光産業の高齢化が進行していることを考慮すれば、そのライフサイクルは、停滞か衰退の段階に入っているといえよう。

先の TALC の議論によれば、許容能力の範囲の中で持続的な成長を遂げる再生の経路を目指すことが好ましい。さらに、季節変動の視点でいえば、ある一時点に観光客が集中するような需要の分布は、経済的にも社会的にもネガティブな影響を生むために、ある程度、分布を平準化させるように成長させた方がよい。

そのような許容能力の設定や需要の平準化は、市場機構に自由放任するのではなく、行政や地域共同体の自治も関与する必要がある（文献[11]）。当然ながら、そのためには、地域が自らのコミュニティにおいてどのように「観光」を位置づけるのかというビジョンを共有する必要がある。地域社会の持続可能性を考えれば、そのビジョンに基づいて観光の許容能力の範囲を設定し、その範囲で発展経路を描くべきであろう。バトラーの TALC では、許容能力の範囲が成熟期・衰退期を基準に、「許容能力」の範囲が決定されている。バトラーの真意は別にあるにせよ、ライフサイクル曲線上で発展経路を考えることは、その水準を維持するために、地域社会が常に経済的競争に関与し続けることにならないだろうか。もし、その地域社会によって設定された範囲がバトラーで示されているよりも下方に設定されれば、図7の右側に描かれているように、その範囲の中に発展経路をシフトさせることも考えられよう。

もちろん、このことは、地域社会や経済の衰退を奨励しているわけではない。TALC の成長曲線は、観光客数という数量を基軸とした発展経路である。例えば、必ずしも、マスツーリズムのように大衆的な観光客を多く誘致せずとも、付加価値の高い、ニッチな観光地を目指すような戦略でも観光産業の収益を伸ばすことは可能である。

前述したように、津和野では、早い段階で観光発展に伴う社会問題が指摘されている。1971年に刊行された『津和野物語』（文献[2]）の中で、河川の汚染や廃棄物の増加などの「観光公害」の問題、外部の大手資本の参入、地域の歴史や文化に無関心な観光客の存在などに警鐘が鳴らされている。早い段階から、この

ような過去の危機感は、今後の津和野の観光を考える上でも参考になるのではないか。

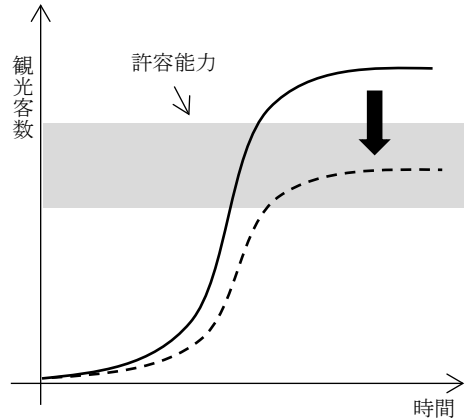


図7：修正された TALC の発展経路

また、観光ブームの後、津和野の町づくりでは、観光だけではなく、歴史文化や景観の保全に努めているようにみえる。津和野町では、1990年代から観光需要の低迷が続く中で、歴史や伝統行事を観光資源として活用する一方で、2013年の重要伝統的建造物群保存地区の登録や2015年と2019年の日本遺産の登録（百景図・神楽）など、歴史文化や街並みのような文化資本を保全する努力も行われている。2017-2021年度の津和野観光振興計画の中でも、観光産業の競争力を高めるだけでなく、「豊かな景観・観光資源の維持・整備・活用」が指針の一つとして掲げられ、とくに活用のあり方について議論されている。

地域の文化資本が保全・整備され、その魅力が発信できれば、それは付加価値の高い観光資源として活用できる。ただし、観光資源としての経済的価値を高めるために開発（商品化）が優先されれば、文化遺産や景観が歪められ、喪失しかねない。観光それ自体が目的になるのではなく、歴史・文化や景観が後世に継承されるために、観光が位置づけられるべきではないか。かつてのようにマスツーリズムに走るのではなく、歴史・文化や景観に関心のある観光客を中心に誘致するような戦略が求められよう。

経済要素としての観光は、本来的には地域社会の一要素でしかない。にもかかわらず、それが他の要素を飲み込むように大きくなるのであれば、それは望ましい地域社会の状態とは言えないだろう。本当の再生とは、観光（経済）という要素を地域社会に再び埋め込

む (re-embedded) ように社会を構築し直す、カール・ポランニー的な「大転換」を果たすことではないだろうか (文献[12])。

## 5. おわりに

本稿では、津和野観光の動態を季節変動性の分析とバトラーの TALC から考察を行った。全体として、観光需要の低迷が続く中で、その変動性は縮小している傾向にある。TALC でいえば、停滞・衰退段階に至っているといえるだろう。本稿の議論から、今後の津和野観光としては、需要を平準化しつつ、許容能力の範囲内で、自然や文化遺産の継承と観光発展の均衡が維持されるような経路を描くことが示唆される。

この示唆は、一定程度、他の東アジアの地域社会にも当てはまるといえよう。「小京都」とは、日本における一つの文化様式であり、さらに、そのルーツを辿れば東アジア諸国とも共有した一つのアイデンティティを見出すこともできよう。また、四季が生み出す観光の季節性も東アジア特有である。もちろん、津和野の研究結果が他の地域にそのまま当てはまるわけではないが、一つのケーススタディとしては示唆に富んでいる。今後、東アジア地域における観光需要の季節変動性や TALC の研究蓄積が進むことで、地域間の類似性や差異性が比較研究を通して明らかになることが期待される。

加えて、本研究は、ポスト・コロナにおける観光のあり方にも示唆を与えるものである。新型コロナウイルスの流行は国内旅行・海外旅行に多大な影響をもたらした。コロナ禍以前 (2019 年) から訪日外国人旅行者のうち 70.1% を占める東アジアの複数の国と地域では、観光往来再開に関して新たな動きがみられる (文献[13])。例えば 2021 年 11 月の段階で、国内感染が少ない台湾では、日本の感染者数の減少を受け、すでに台湾とパラオとの間で実施されている隔離期間を設けない観光往来の枠組み「トラベルパス」の実現を日本との間で協議していることが担当相より明らかにされた。アジア地域、特に東アジアからのインバウンド需要が急速に回復する見通しの中で、今後、日本の観光地の魅力の創出と発信、またその過程におけるコロナ禍による変容の有無についての事例研究が急がれる。本稿は、このようなポスト・コロナ時代における観光需要の基盤研究としての意義をもつ。

本稿では、需要の動向から津和野観光を定量的に分

析したが、当然ながら、供給側の定量的な分析も求められる。残念ながら、宿泊施設、飲食店、博物館・美術館などの供給側の統計は公開されていない。しかし、電話帳、地図、観光ガイドなどの資料を基にデータベースを作成する必要がある。また、TALC では観光客のタイプの変容や資本の所有関係が議論される。これらの分析も今後取り込まれる必要がある。最後に、周辺の観光地である山口市や萩市との関係も踏まえた議論されるべきであろう。残された課題は多いが、以上については別稿に譲りたい。

## 謝辞

本稿は、JSPS 科研費 19K20525、17K02127 の助成を受けた成果の一部である。

## 文 献

- [1] 津和野町 (2020) 「まち・ひと・しごと創生 津和野町人口ビジョン (改訂版)」 (<http://www.tsuwano.net/www/contents/1455061351797/files/1.pdf>) .
- [2] 『津和野物語』島根県朝日会、(1971)
- [3] 『島根県観光動態調査』(平成 17 年度～平成 31 年度) ([https://www.pref.shimane.lg.jp/tourism/tourist/kankou/chosa/kanako\\_dotai\\_chosa/](https://www.pref.shimane.lg.jp/tourism/tourist/kankou/chosa/kanako_dotai_chosa/)) .
- [4] 大井達雄 「宿泊旅行統計調査による季節変動に関する一考察」『第 3 回観光統計を活用した実証分析に関する論文 (平成 23 年度)』, pp. 1-13 頁 (2011) .
- [5] Butler, R. W. 'The Concept of a Tourist Area Cycle of Evolution: Implications for Management of Resources,' XXIV, 1, pp. 5-12 (1980).
- [6] Romão, A., K. Kouritit, B. Neuts and P. Nijkamp 'The Smart City as a Common Place for Tourists and Residents: A Structural Analysis of the Determinants of Urban Attractiveness,' Cities, 78, pp. 67-75, (2018).
- [7] 森川正之 「外国人旅行者と宿泊業の生産性」RIETI Discussion Paper Series 15-J-049, pp. 1-21 (2015) .
- [8] Lundtorp, S. (2001) 'Measuring Tourism Seasonality,' Seasonality in Tourism, pp. 23-48, (2001).
- [9] 『津和野町電話帳 企業・個人 50 音別電話帳』中国出版会 (1985) .
- [10] 『つわの 宿の本 (令和 3 年版)』津和野旅館組合 (2021) .
- [11] 中平千彦・藪田雅弘編『観光経済学の基礎講義』九州大学出版会 (2017) .
- [12] ポランニー、カール『大転換』東洋経済新報社 (2009) .
- [13] 日本政府観光局 「日本の観光統計データ」 (<https://statistics.jto.go.jp/>)



---

〈著者略歴〉

**PERLAKY Denes** (ペルラキ ディーネッシュ)

2009年ブタペシュト・コルヴィヌス大学修了, 2020年山口大学東アジア研究科博士課程修了, 博士(学術).  
現在, 山口大学経済学部助教。

**森 朋也** (もり ともや)

2010年中央大学経済学部卒業, 2012年中央大学大学院経済学研究科博士前期課程修了, 2015年中央大学大学院  
経済学研究科博士後期課程修了, 博士(経済学)。現在, 山口大学教育学部講師。

**生駒 亜樹子** (しょうじま あきこ)

1998年九州大学教育学部卒業, 2001年九州大学大学院人間環境学研究院修士課程修了, 修士(教育学)。現  
在, 山口大学教育学部准教授。